

令和 元年 6 月 24 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02747

研究課題名(和文)大学キャンパスにおける日本人学生の英語によるコミュニケーションの研究

研究課題名(英文)English Communication on Campus at University in Japan

研究代表者

クルーグ ネイサンポール(Krug, Nathan Paul)

埼玉大学・英語教育開発センター・准教授

研究者番号：40549995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：近年、日本人学生の英語力向上を目指し、大学は英語開講科目を作ったり、英語会話が練習できる学習支援室を設置したり、様々な英語使用環境を用意している。そのような場では日本人学生同士が英語で会話をするように求められるが、そこで実際にどのような会話が行われているのか、どのように英語学習が行なわれているのかは十分に明らかになっていない。さらに、キャンパス内では日本人学生が留学生を相手に英語で会話する機会もあると思われるが、そのような場面でのコミュニケーションについてもまだ明らかではない。本研究は、3種類の調査を通して、そういったキャンパスでの日本人学生の英語によるコミュニケーションの特徴について論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は次の二つである。まず、実際の会話を微視的に分析することで、日本の大学キャンパス内で日本人学生が行う英語会話の中で、どのような言語・非言語的資源を用いて会話が成し遂げられているか、どのような学習が起こっているのかを記述することができた。二点目は、その結果に基づき英語学習環境の評価のための観点を示し、大学キャンパスで行われる3種類の英語会話について、英語学習上の重要性和問題点を論じたことである。教育機関で英語学習を狙って新たな英語使用環境を導入した場合、それを評価する仕組が必要となるが、本研究はその評価の枠組み作りの第一歩を踏み出すことができたのではないであろうか。

研究成果の概要(英文)：Over recent years, there has been increasing interest for universities in Japan to create English speaking environments for the purpose of enhancing Japanese students' English abilities. In such environments, Japanese students are encouraged (or required) to speak in English to fellow students as well as to their instructors. But what kinds of English interaction actually occur? And what kinds of learning can be observed? These matters have not yet been substantially investigated. Likewise, naturally occurring English speaking occasions are also increasing across campuses in Japan, such as when local students speak with visiting international students. However, the features of those kinds of conversations have not yet been examined in much detail either. This study analyzes authentic English conversations which occurred in three different environments, and begins the discussion about the features of interest of each situation.

研究分野：談話分析、英語教育

キーワード：英語学習 英語コミュニケーション 日本人の英語 会話分析 インターアクション

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本のように英語が外国語として話される EFL 環境では、英語学習者が実生活の中で英語でコミュニケーションを行なう機会は限られている。そのような問題を解決するため、大学などの教育機関は、教室内外で日本の学生が英語使用を体験できるよう、英語で開講される授業、英語会話を練習できる英語学習支援室など、さまざまな英語使用環境を用意している。さらに、そのような場面は、グローバル人材育成などといった社会的要請に応じて日本人学生の英語力向上を目指し、増えてきている。そのような場では、日本人学生同士が英語で会話をするように求められるが、そこで実際にどのようなコミュニケーションが行われているのか、どのように英語学習が行なわれているのかは十分に明らかになっていない。一方、大学が用意した英語使用環境の他に、大学が関知しないところで起こる自然発生的な英語使用環境もある。例えば、サークルやグループ学習などに留学生が参加していることもあり、そこで日本人学生が英語で会話をすることもある。キャンパスのグローバル化や留学生 30 万人計画などの影響により、そのような場面も、近年増えてきている。しかし、そのような場面でのコミュニケーションについてもまだ十分に明らかにされていない。第二言語としての英語学習者が参加する会話について、近年、研究が進められてきている。しかし、従来の研究は、海外の教育機関における教育実践とその中で行なわれるコミュニケーションを研究の対象としたものが多い。その知見は大いに参考にできるものの、そのまま日本の大学生にも当てはまるとは言えない。そのため、日本の大学キャンパス内で行われるさまざまな英語会話の様相を記述し、英語学習という観点から、その効果を検討する必要があるであろう。

### 2. 研究の目的

上記の研究の必要性から、本研究課題は、大学キャンパスでの日本人学生の英語によるコミュニケーションの実態を、実際に行われたさまざまな場面での会話の分析によって明らかにすることを旨とする。大学によって用意された英語使用環境での会話、自然発生的な場面での会話を広く研究の対象とし、日本人学生が日本人学生同士、または留学生相手に、英語によるコミュニケーションをどのように行っているのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究課題で用いるデータは、表 1 に示した 3 種類の会話である。

表 1 本研究課題で用いるデータ

1) 英語学習支援室での会話	3 名以上の多人数会話 10 組分 (各 30 分程度)
2) 英語開講科目または英語科目での活動中の会話	4 名のグループディスカッション 教室内・教室外各 20 組分 (各 20~60 分程度)
3) 日本人学生と留学生の雑談	2 名のビデオチャット 20 組分 (各 20~30 分程度)

本研究課題では、上記 3 種類の会話の特徴を記述し、英語学習という観点から、それぞれの会話に日本人英語学習者が参加することの意義と問題点を考察する。

分析にあたっては、データ全体の特徴を大まかに把握すると同時に、必要に応じて、1~2 件の少数の会話を選び、詳細に起こっていることを観察するという方法を取った。会話分析の手法を用い、韻律の変化や声の調子、ポーズ、笑いなどの微細な特徴に注目しながら、日本人学生がどのように英語でのコミュニケーションを行うのかを明らかにする。特に言語的な困難をどのようにカバーし、会話を成し遂げるか、会話中にどのような学習が成し遂げられるかに注目して分析する。

### 4. 研究成果

本節では、本研究課題の成果のうち、主なものについて報告し、その学問的意義と今後の展望について述べる。

#### (1) 英語学習支援室での会話の分析 (Krug, 2019)

英語開講科目や英語の授業以外で、英語学習に関わる支援を受けたい学生のために、多くの大学が英語学習支援室を用意している。英語母語話者の教員等が常駐していることが多く、英語に関する質問を受け付けたり、英語作文の添削をしたりしている。また、英語での会話を練習したい学生が集まり、テーマを決めて意見交換したり、特に話題を決めずに自分たちの興味のあることや経験について語り合ったりすることもある。

そのような会話グループの参加者は、偶然その日に共に参加した初対面の者同士であることもあれば、繰り返し英語学習支援室を訪れることで、学部等が違い友人とは呼べないが、顔見知り程度の関係を築いている者同士であることもある。しかし、いずれにせよ、参加者たちの会話グループ参加の第一の目的は、英語学習である。そのような者同士の会話にはどのような特徴があるのだろうか。2 組 (いずれのグループも会話参加者は 3 名) の会話を会話分析の

手法で分析したところ、次の二つの特徴があることがわかった。

まず、発言機会の配分が、参加者全員でできるだけ平等になるように工夫がされるということである。1名だけが自分の話を長々と続けるということは見られなかった。時には、参加者のうち2名だけにわかる話が始まったり、2名の間でだけ質問と応答の連鎖が起こったりすることもあるが、そのような話題は長くは続かず、その後、黙っていた1名に質問が向けられるなどの工夫により、特定の参加者に発言機会が偏ることのないように会話が行われていた。参加者達の間で、会話グループに参加する者は皆学習の目的で来ていること、自分の学習の機会の確保も大切であるが他のメンバーの学習の機会を奪ってはいけないという意識が共有されているために、会話グループの会話はこのような特徴を持つものになるのかもしれない。

また、会話グループの会話には、質問が連続する局面が多く見られるという特徴もあった。会話の開始部はもちろんのこと、それ以外でも話題の切れ目には、複数の参加者から質問が連続して繰り出され、発展していきそうな話題が見つかるまで続いていた。このような会話の特徴は、初対面の者同士であったり、顔見知り程度の者同士が参加するイベントであったりすることと関係があるであろう。また、決められた時間、続けなければいけない会話であるため、話すことがなくなったからといって早めに活動を切り上げることはできず、話題を探す努力がなされていたものと思われる。

会話グループの会話の中では、語彙学習がよく起こっていた。決められたテーマなどで話す中で、その内容ではなく、使用する語に焦点が当たる局面がある。そのような学習は、相手の話の中に含まれる語の意味がわからない、自分が表現したい内容を表す語が見つからないといった問題を契機に生じる修復を通して起こる。自宅などで一人で学習するのは異なり、会話進行のために必要に迫られて起こる学習であること、グループの他のメンバーとの協働により達成される学習であることが英語学習支援室での会話に参加することの意義と言えるのではないだろうか。

## (2)英語で開講される授業内でのディスカッション (Otsu & Krug, 2019)

英語開講科目や大学での英語授業の中で行われるアカデミックな活動の一つにグループディスカッションがある。グループディスカッションには、ブレーンストーミング型、問題解決型、賛否両論型などさまざまなものがあり、それぞれに異なる会話の特徴、英語学習者の問題点があるであろう。その中でも Otsu & Krug (2019) では、ディスカッショングループの参加者のうち1名がファシリテーターとして話し合いを管理する場合を研究の対象とする。ファシリテーターを務めるグループリーダーは、事前にテーマを決め、それに関する記事をメンバーに配布していた。また、その読解を支援するためのワークとディスカッションのための質問も事前に用意し、メンバーに準備してくるように指示をしていた。しかし、メンバー全員が指示のとおり準備してきたにもかかわらず、当日のディスカッションでは活発な意見交換は実現せず、テーマに関するメンバーの理解も深まらなかった。それはなぜかを明らかにするために、グループリーダーのふるまいに注目して2組(参加者各4名)のディスカッションを、会話分析の手法で分析した。

その結果、グループリーダーの次の3つの行動が話し合いの活性化を妨げていたことが明らかになった。第一に、グループリーダーがメンバーに質問を向ける時、全員に宛てるのではなく、メンバーの一人一人に順に質問し、回答者を限定しているということがわかった。第二に、メンバーからの回答を得た際、グループリーダーはそれに対して何らかのコメントをする必要があると思われるが、そのようなコメントはなく、単に「Thank you.」とだけ述べ、次のメンバーに同じ質問を向けたりしていた。グループリーダーがコメントをすることで、メンバーからさらなる意見表明や検討の観点が示され、テーマの掘り下げにつなげることができると思われるが、そのような行動は見られなかった。第三に、グループリーダーの質問に対して各メンバーから回答を得たところでメンバー間の意見の違いや共通点などについてグループリーダーはまとめを行う必要があると思われるが、そのようなまとめはなく、次の質問に移ってしまっていた。このことも、テーマの掘り下げや活発な意見交換に繋がらなかった原因の一つであろう。

英語で行われる授業の中で、学生の主体的な学びを実現するための方法の一つとして、グループディスカッションが行われることはよくある。しかし、教師は単にグループ分けをするだけで後は学生に全て任せるというのでは、期待どおりにはうまく行かない。分析の結果、グループリーダーとメンバーに相当の準備をさせても、話し合いの仕方そのものを知らない場合はすぐには実り多いディスカッションは実現しない。そのため、教師は話し合いとファシリテーションのための練習のステップを用意しておく必要があるであろう。

## (3)日本人学生と留学生との間の雑談 (Krug, in press)

英語開講科目や英語学習支援室のような大学が用意した英語使用環境以外にも、日本人学生が英語を使用する機会はある。その主なものとして、大学キャンパス内での留学生との雑談がある。日本の大学では、学部生や大学院生だけでなく、交換留学生など非正規生も含めると、多くの留学生が学んでいる。大学によっては、留学生支援の一環としてさまざまな国際交流イベントを開催したり大学公認のサークル活動を支援したりして、日本人学生との出会いの場を用意することがある。また、日本人学生の英語をはじめとする外国語学習支援も兼ね、タンデ

ム学習などを推奨し、日本人学生と留学生のマッチングを行うこともある。そのようにして出会った日本人学生と留学生は大学食堂で食事を共にしたり、時々会って雑談をしたりして、徐々に友人としての関係を深めていく。

Krug (in press)では、そういった日本人学生と留学生の雑談のうち、互いの目標言語（日本人学生にとっての英語、留学生にとっての日本語）での会話練習パートナーとして紹介されたペアの初回の会話をビデオ収録し、分析を行った。これは正課外の活動であり、日本人学生側も留学生側も時間割の都合上、日中に互いに会う時間を確保するのが難しいということで、時間と場所を問わないビデオチャットの形で行われた。初回の会話であったため、互いに初対面で、互いを知るための話題が主であった。

日本人学生は普段英語の授業などで教師の主導で、決められた話題で英語での会話練習を行うことが多い。さらにそのような環境では、会話の開始や終結、話題転換といったことまで教師によって枠づけられ、学生自身は与えられた課題遂行や内容理解に集中し、会話の進め方まで気を使う必要がないことも多いであろう。一方、初対面の留学生と教室外でビデオチャットをするとすると、そういったことまで自ら行わなければならないうえに、会話練習パートナーとして良い関係を構築、維持するためには対教師、対クラスメートとは異なる気遣いが必要になるなど、さまざまな点で難易度が高い。そこで、日本人学生がどのように相手と協働で雑談を管理していくかを明らかにするために、2組の会話を会話分析の手法で詳細に観察した。

分析の結果、まず、英語授業内での様子と異なり、日本人学生が積極的に相手に質問を繰り返し出し、相手の発話を誤解したり、自らの発話が誤解されたりしたときにも、それをそのままにせず、すぐに修復を開始し、会話が破綻しないようにしていた。また、誤りのリスクがあっても、相手から新しく習った言葉を使用しているのが観察された。自分の知らない言葉が相手の発話にあった時、日本人学生は相手にそのスペリングを聞くというストラテジーを繰り返し使用していた。わからない言葉を、わかったふりをしてやり過ごすことはせずに、語彙学習に繋がっていた。さらに、その後の会話の中で積極的にその語を使用して会話を続けることで、話題の不自然な中断はなく、自然な話題展開に貢献できていた。分析の対象となった日本人学生は、発音の仕方や即興で文を作るという点では英語能力は高いとは言えない。しかし、さまざまな相互行為のためのストラテジーを用いて、雑談を管理することができていた。

雑談というジャンルの会話を日本人学生が経験することの意義も、本研究のデータ分析の結果から見えてくるのではないだろうか。会話における全てを、相手と協働で管理する経験は、英語開講科目や英語学習支援室のような大学が用意した英語使用環境では起こりにくい。しかも、そういった場では見られないような日本人学生の積極性も、もちろん個人差はあるであろうが、雑談の中には見られる。そのため、日本人学生と留学生が出会える場を作るということは、今後、日本人学生への英語教育を考える際に、重視する点の一つとなるのではないだろうか。

#### (4)本研究課題の学問的意義と今後の展望

本研究課題の学問的意義は次の二つである。まず、実際の会話を微視的に分析することで、日本の大学キャンパス内で日本人学生が行う英語会話の実態の一側面を明らかにしたことである。それらの会話の中で、日本人学生がどのような言語・非言語的資源を用いて会話を成し遂げているか、どのような学習が起こっているのかを記述することができた。二点目は、その結果に基づき英語学習環境の評価のための観点を示し、大学キャンパスで行われる3種類の英語会話について、英語学習上の重要性和問題点を論じたことである。教育機関で英語学習を狙って新たな英語使用環境を導入した場合、それを評価する仕組みが必要となる。本研究はその評価の枠組み作りの第一歩を踏み出すことができたのではないだろうか。今後は、さらに分析の対象となる会話の種類を増やすと同時に、多様な観点からそれらの会話を分析することで、実際に教育機関内の英語使用環境の評価に使える枠組み案を示し、試行していく必要がある。

#### 引用文献

- (1) Krug, N. P. (in press). Moments of second-language conversation outside of the formal language classroom, *Accents Asia (Journal of the Teachers College Columbia University Japan Alumni Association)*, pp. 1-17.
- (2) Krug, N. P. (2019). Shifts in participant orientation in conversation-for-learning, 11th Annual North East Asian Region Language Education Conference, June 1, 2019, University of Niigata Prefecture, Japan.
- (3) Otsu, T. & Krug, N. P. (2019). How group leaders' interactional practices influence group discussions: Group leaders' problems and the pedagogical implications, 11th Annual North East Asian Region Language Education Conference, June 1, 2019, University of Niigata Prefecture, Japan.

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) Krug, N. P. (in press). Moments of second-language conversation outside of the formal

language classroom, *Accents Asia (Journal of the Teachers College Columbia University Japan Alumni Association)*, pp. 1-17.

(2) Krug, N. P. (2018). Active engagement in discussion: Scaffolding for second-language learners, *International Journal of Language, Literature, Culture and Education*, 3, pp. 1-15.

(3) Krug, N. P. (2018). And, so, where do you stand? Engaging students in academic discussion, *Proceedings of the 10th International Conference on Language, Literature, Culture and Education*, pp. 191-206.

(4) Krug, N. P. (2018). Communicative competence: A focus on incompetence, *Saitama University Review (Faculty of Liberal Arts)*, 53(2), pp. 177-187.

〔学会発表〕(計6件)

(1) Krug, N. P. (forthcoming). Complexities in opening a computer-mediated second-language conversation, *Foreign Language Education and Technology VII*, August 6-9, 2019, Waseda University, Japan.

(2) Krug, N. P. (2019). Shifts in participant orientation in conversation-for-learning, 11th Annual North East Asian Region Language Education Conference, June 1, 2019, University of Niigata Prefecture, Japan.

(3) Otsu, T. & Krug, N. P. (2019). How group leaders' interactional practices influence group discussions: Group leaders' problems and the pedagogical implications, 11th Annual North East Asian Region Language Education Conference, June 1, 2019, University of Niigata Prefecture, Japan.

(4) Krug, N. P. (2019). Second-language conversation outside of the formal language classroom, *English Teachers in Japan Expo 2019*, February 23-24, 2019, Otsuma Women's University, Japan.

(5) Krug, N. P. (2018). Productive small-group academic discussion: An approach for the second-language classroom, 10th International Conference on Language, Literature, Culture and Education, March 23-24, 2018, Royal Plaza on Scotts, Singapore.

(6) Krug, N. P. (2018). Scaffolding as a tool to foster small-group L2 discussion, *English Teachers in Japan Expo 2018*, February 10-11, 2018, Kanda Institute of Foreign Languages, Japan.

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：大津 友美

ローマ字氏名：(OTSU, Tomomi)

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：大学院国際日本学研究院

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20437073

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。